

4 資源管理漁業推進事業

(1) 資源管理漁業推進事業

資源実態調査

富山 実・板東正夫

キーワード；資源管理型漁業，イカナゴ，ヤリイカ

目 的

愛知県が策定した「複合的資源管理型漁業活動指針」及び「複合的資源管理型漁業活動計画」に基づき、愛知海域における資源管理型漁業の推進を図る。

方 法

(1) 小型底びき網漁業資源調査

外海操業小型底びき網の重要資源であるヤリイカの資源実態を調査するために、5回市場調査を行った。さらに、産卵調査のために、1月18日に産卵基質を伊勢湾口水深88mの海域に投入した。

(2) 船びき網漁業資源調査

イカナゴ船びき網漁船を備船して、伊勢・三河湾、外海で2月8日に小規模試験びきを、2月18日に合同試験びきを行った。解禁後は出漁日毎に市場調査を行い、イカナゴの体長、体重を測定した。初期資源尾数を算出するために、毎出漁日に市場調査を行い、Delury法を用いて初期資源尾数を算出した。

結 果

(1) 小型底びき網漁業資源調査

ヤリイカの分布域について、今までの調査結果をまとめて8月16日に開催された外海底びき網研究会総会で発

表した(図1, 2)。さらに、本年の分布域に関する情報を加えて、7, 8月に137°07' 以東静岡県境までの水深90-105mを禁漁区に設定し、9月2日から解禁した。解禁後の漁獲量は、昨年と同様今期も少なかった。漁期は散発的に12月まで続き、主に片名市場、一色市場に水揚げされた。

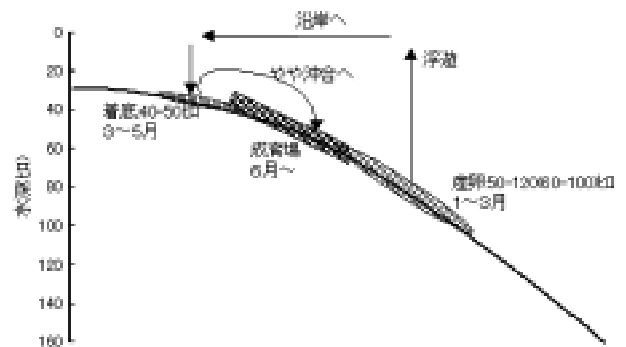


図2 鉛直的に見たヤリイカの分布図

(2) 船びき網漁業資源調査

イカナゴの調査結果は資源管理促進委員会ほかで発表した(表1)。また、図3に示す合同試験びきの結果から、愛知、三重両県漁業者が協議し、解禁日は2月21日と決定した。22日の初漁日(21日は荒天のため順延)以後は、3月中旬までは単価が高く推移したこともあり、好調な

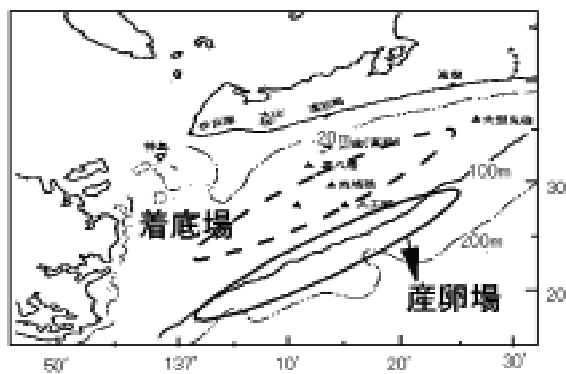


図1 渥美外海におけるヤリイカの分布

表1 資源管理に関する主な説明会・協議等

開催時期	名 称	内 容
8月16日	外底研究会総会	ヤリイカの解禁について
10月8日	資源管理講習会	小底の漁具について
1月9日	三重県親イカナゴ試験びき	三重県親イカナゴ漁の操業について
1月25日	パッチ網総会	イカナゴ調査報告
1月29日	資源管理促進委員会	調査結果報告
2月5日	調査説明会	調査結果報告
2月15日	大浜青年部総会	調査結果報告
2月19日	愛知・三重解禁日協議	両県解禁日協議
3月24日	休漁期設定の協議	今後の操業方法

水揚げが続いた(図4, 5)。

漁場としては、解禁当初は伊勢湾南部の石が瀬と三河湾の布土沖が主だったが、その後、伊勢湾は白子瀬、空港島沖にも漁場が広がった。三河湾では、佐久東に漁場が移り、好漁場が持続して形成された。3月中旬以後は急激に水揚げ量が減少し、魚体も大型化してきたために、3月23日で加工用イカナゴは終漁し、休漁期に入った。

15年4月以後は、餌料用イカナゴ漁が再開される予定である。

講じた資源管理方策は、① 1月上旬にふ化直後の仔魚を保護するため、ぱっち網、しらす船びき網の湾口部外海側および伊勢湾南部の禁漁区設定、② 魚体が加工用としては大きすぎ、餌料用としては小さすぎる時期の休漁期設定(実施は3月24日)の2項目である。

なお、以上の結果は「平成14年度複合的資源管理型漁業促進総合対策事業報告書」に詳述した。

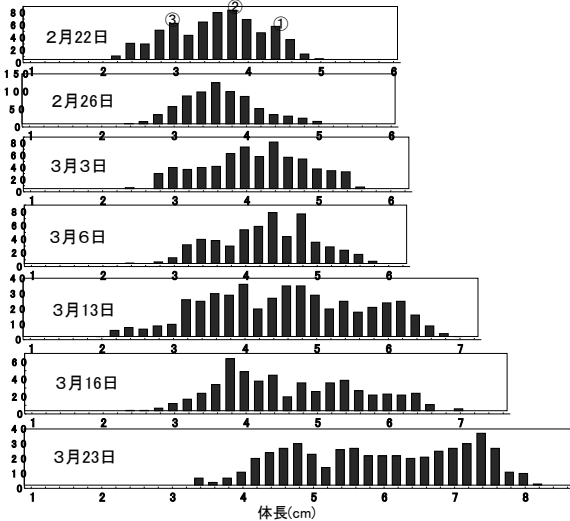


図4 解禁から加工用終漁までのイカナゴの体長組成

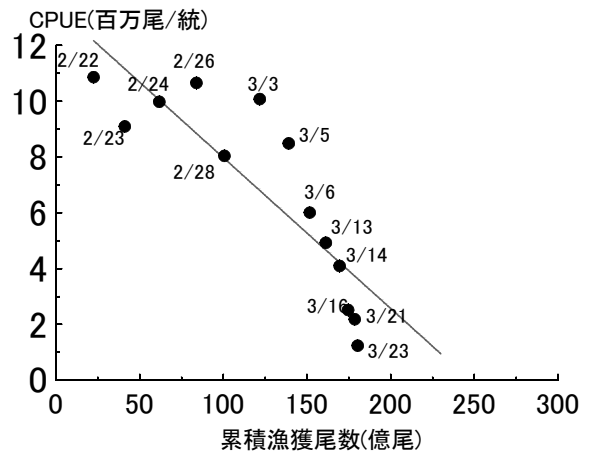


図5 イカナゴ初期資源尾数の推定(Delury法)

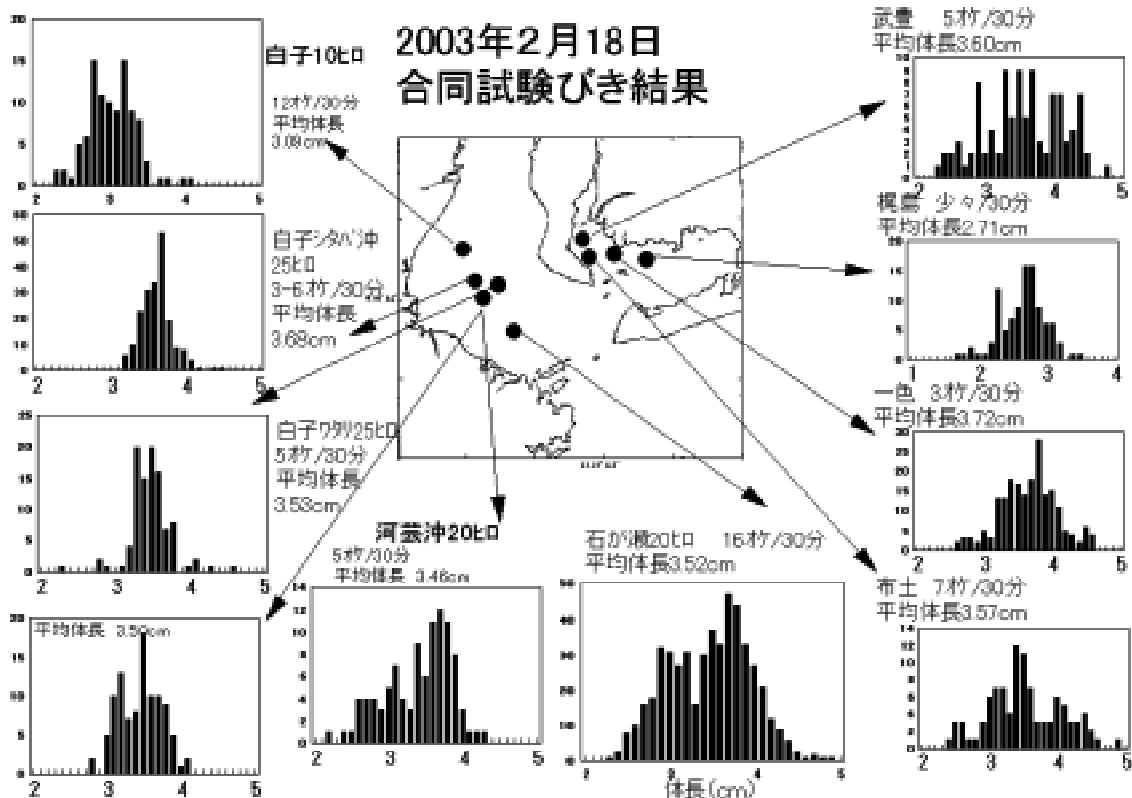


図3 イカナゴ合同試験びき採集結果

(2) 水産基本政策推進事業

漁具改良試験

富山 実・岩崎 員郎

キーワード；資源回復計画，伊勢湾，小型底びき網

目 的

水産庁が策定した「伊勢・三河湾小型機船底びき網漁業対象種資源回復計画」および県が策定した「複合的資源管理型漁業活動指針」に基づき，伊勢湾海域における資源回復を目的とした小型底びき網漁具の改良試験を行う。今年度は，漁獲物に海水をシャワー状に散布する装置を設置し，選別途中の漁獲物の活きを良くすることにより，漁獲物における活魚の割合を高めると同時に，小型のシャコやカレイ類幼魚を，選別後に海に戻す際の生残率を高める装置の開発を目指した。また，現行の漁船，漁具を見直し，資源回復に有効な改良点がないかを検討した。

方 法

(1) シャワー式装置

豊浜漁協所属の小型底びき網漁船のうち，昼操業，夜操業各1隻にシャワー装置を設置するために，設置可能な装置の仕様を検討した。項目は，ポンプの規模，給水方法，パイプの径，パイプに開ける穴の径等についてである。

また，上記2隻については，実際の操業の際にシャワー装置を使用してもらい，その効果について聞き取り調査を行った。

さらに，3月14～15日には，福岡県豊前市牛島漁業協同組合でシャワー式装置の視察を行った。

(2) 漁具・漁法の検討

現行の小型底びき網漁船および漁具に関して，改良すべき点がないか，(株)ニチモウの熊沢氏を招き，10月8日に，漁業生産研究所で，地元漁業者を対象に，講演会および意見交換会を開催した。そして，12月10日には，水産工学研究所，ニチモウとともに，豊浜漁港内でカイト式開口装置の試験を行った。また，1月11日には，豊浜漁協所属の小型底びき網漁船の網口に水中ビデオ（五島マリン社製）を取り付け，網口の接地状況を試験的にビデオ撮影した。

3月7日には，水試漁業生産研究所において，遠洋トロール協会の吉田光徳氏を講師として，海外での漁船漁業の動向についての講演会を開催した。

結 果

(1) シャワー式装置

豊浜漁協所属の小型底びき網漁船にシャワー装置を設置する際の検討点として，以下のような点が挙げられた。
*1：電源，*2：ポンプの能力，*3：逃がしバルブの設置，*4：塩ビパイプ径，*5：穴の径及び数，*6：パイプ端末への逃がしバルブの設置。小型底びき網漁船は，地区，規模等により艀装が船毎に異なるため，今後，これらの点について検討することが必要であることが分かった。

実際の操業での使用結果の聞き取り調査結果では，昼間操業のシャコや夜間操業のエビ類で，選別後の活度が上昇したとのことだった。次年度は，生残率の調査を行い，効果の定量評価を行う必要がある（図1，2）。

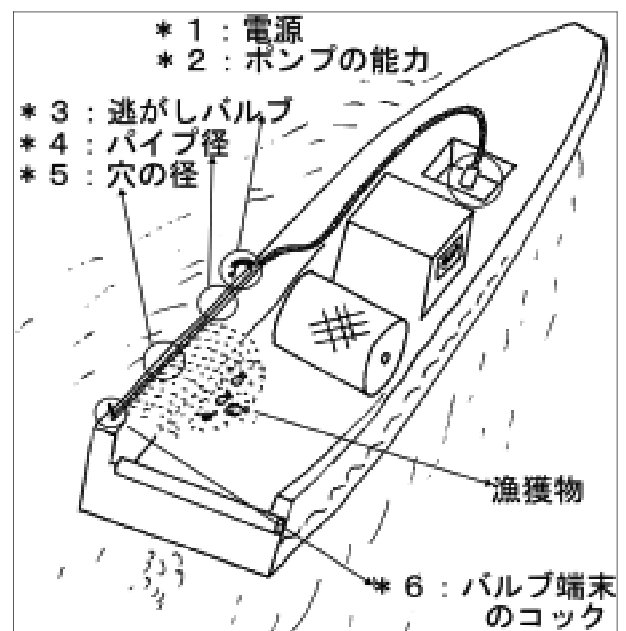


図1 シャワー装置の模式図と検討点



図2 シャワー式装置

(2) 漁具・漁法の検討

伊勢湾の小型底びき網漁船の開口板を測定したところ、縦68cm、横178cm、面積1.21㎡、縦横比1：2.62と横長である。このため、海底面との接地部分が長く、海底環境に影響を与えていることが懸念された。今回試験した布製開口装置（カイト）は、海面での開口試験では良好



図3 カイトでの開口状況

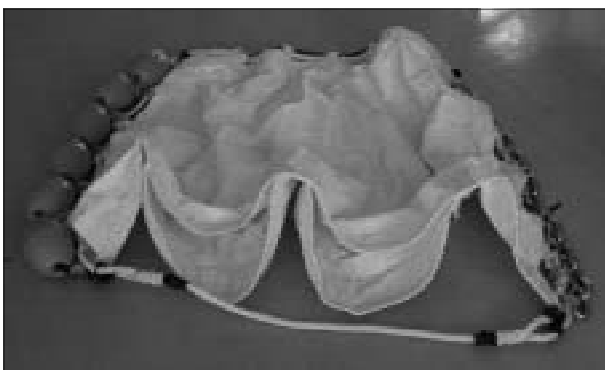


図4 試験に用いたカイト

な結果だったが、実際に着底させ、漁業者が操業時にやっている転回を行った場合の安定性等に、まだ検討の余地が残されている（図3、4）。

12月18日には、水産庁の主催で、資源回復計画に係る漁具改良試験に関する会合が水産庁で開催された。その会議で、このカイト式開口装置試験について、概略を説明した。

1月11日に実施した水中ビデオによる漁具の撮影試験では、網口部のロープが接地し、砂を巻き上げている様子が撮影できた。今回は、漁獲物が実際に入網する瞬間を撮影することは出来なかったが、画像はぶれることなく、鮮明だった（図5）。

3月7日に開催された講演会には、小型底びき網漁業者を中心に約50名が参加した。この際、最近20年のヨーロッパでの漁船漁業の状況が紹介され、漁業者とも活発な討議がなされた（図6）。



図5 底びき網への水中ビデオ装置の設置



図6 吉田氏を招いての講演会

小型魚混獲実態調査

坂東正夫・水野正之・岩崎員郎

キーワード；資源回復計画，トラフグ，マアナゴ，シャコ

目 的

資源回復計画対象種であるトラフグ，マアナゴ及びシャコに関して商品価値が低いか，または無い小型個体が混獲され，問題がある。これら資源の保護のための基礎資料収集のため混獲状況について調査を行った。

(1) トラフグ

方 法

小型底びき網漁業で漁獲され始める前に，トラフグがまとまって混獲される漁業のひとつとしてパッチ網漁業がある。

今回はパッチ網漁業に混獲されるトラフグを入手し，全長測定を行った。

結 果

パッチ網漁業によるトラフグ小型魚の混獲は7月下旬から見られ始めた。混獲されたトラフグの大きさを表1に示した。夏季以降，かなり小型の個体が混獲されていることがわかった。

表1 混獲トラフグの日別全長

月/日	全長 (cm)			測定尾数 (尾)
	最小	平均	最大	
7/31	11.6	12.2	12.6	8
8/2	10.4	12.4	15.0	23
8/21	11.1	13.0	14.6	16
9/5		17.3		1
9/12	13.5	16.5	19.7	64
9/19	18.0	19.8	20.3	6
9/20	18.8	20.3	21.0	6
10/4	16.4	18.9	21.0	7
10/9	16.8	19.5	21.3	14
10/15	13.0	20.4	24.0	23

(2) マアナゴ

方 法

マアナゴに関してはほとんどの漁獲が小型底びき網漁業とアナゴ籠漁業によっている。そこで，今回はこの2漁業種において漁獲された選別前の漁獲物を，それぞれ月1回程度入手し，全長測定を行った。

結 果

資源回復計画の実施にともない，小型底びき網漁業では10月1日～11月30日までの間，商品価値が低い全長25cm以下のマアナゴの水揚げが規制されている。そこで測定結果について，全長25cm以下の漁獲物の割合を表2に示した。小型底びき網漁業においては，全長25cm以下の個体はほとんど漁獲されていないことがわかった。一方，アナゴ籠漁業においては，8月頃から全長25cm以下の個体が漁獲されるようになり，9月には半数が全長25cm以下の個体であった。ただし，漁獲後選別を行っており，小型個体（詳細なサイズについては不明）は放流されているのが実態である。

表3 漁業種類別月別の全長25cm以下の個体の割合
(単位:%)

月	漁業種類	
	小型底びき網漁業	アナゴ籠漁業
5	2	1
6	0	0
7	0	0
8	0	11
9	0	50
10	3	—
11	5	—
12	0	6
1	—	23
2	1	—
3	0	21

(3) シャコ

方 法

小型底びき網漁業で漁獲された選別前の漁獲物を月1回程度入手し、体長測定を行った。

結 果

商品サイズのコホの体長は概ね10cm以上とみられており、地区によっては体長8~10cmのものが小コホとして水揚されている。体長8cm以下の個体については、そのまま海へ戻されている。表3に商品サイズの目安となる体長別の割合を示した。商品サイズ以下のものは春夏季及び12月に多くみられたが、一部選別されてしまっていたサンプルも含まれていた可能性もあって、上記時期以外にも小型のものが漁獲されていたと考えられる。

表2 シャコのコホ別漁獲割合

月	コホ別漁獲割合 (%)		
	8cm未満	8~10cm	10cm以上
5	70	24	6
6	41	54	5
8	23	65	12
8	8	73	19
10	0	53	47
10	0	37	63
11	3	37	60
12	93	3	4
1	3	16	81
2	0	30	70
3	0	18	82

5 水産業技術改良普及

(1) 水産業技術改良普及

沿岸漁業担い手確保推進・育成事業

深谷昭登司・吉村憲一・鈴木好男

キーワード；巡回指導，漁業者育成

目 的

次代の漁業の担い手である漁村青少年を対象に新しい技術と知識を持った人づくりを行うための学習，交流活動を実施する。

県及び各地区沿岸漁業担い手確保推進会議，また各地区の青年漁業者活動協議会に参加し，その活動及び後継者育成について助言した。

各地区漁村高齢者活動，漁業士活動等について助言した。

方法及び結果

県及び各地区漁協青年部連絡協議会の活動について助言した。

(1) 巡回指導

② 学習会

① のり養殖指導

各地区ののり生産安定対策協議会で，今漁期の養殖方針について，品質向上を重点に，漁場行使，養殖管理のポイント等を助言した。また，各地区の講習会で，採苗・育成生産管理，製品加工の技術や経営改善等について指導するとともに，地区研究会，海苔協議会研究部会等グループ活動への助言等を行った。

専門家を招き，漁村青壮年グループを対象に学習会を開催した（表1）。

② 栽培漁業指導

③ 少年水産教室

クルマエビの中間育成・放流を指導し，また研究グループの行う試験研究活動にも助言した。

漁業後継者確保のため，水産に関する基礎知識について中学校生徒を対象に，三河地区，知多地区の2地区で集団学習を行った（表2）。

③ その他

④ 活動実績発表大会

各種グループの会議等へ出席し助言した。

漁村青壮年婦人グループの相互交流と知識の普及を図るため，各グループの研究活動について実績発表大会を開催した（表3）。

(2) 沿岸漁業担い手確保・育成

⑤ 漁業士育成

漁業士活動を促進するため，漁業士育成，研修会，視察交流等を実施した（表4）。

① 助言指導

表1 学 習 会

名 称	研修（学習・講習）内容	開催場所	開催時期	参加人員	講 師 所 属 及 び 氏 名
藻類貝類養殖 技術修練会	平成13年度ノリ流通の概要と今後の見通し	愛知県 一色町 公民館	平成14年 7月16日	72名	愛知県漁連海苔流通センター 加藤 英記
	全国のアサリの資源状況				愛知県水産試験場漁業生産研究所 黒田 伸郎
	今年度の漁期にのぞんで				愛知県水産試験場漁業生産研究所 伏屋 満
	佐賀県におけるノリ養殖生産体制の再編について				佐賀県有明海漁業協同組合連合会 田上 卓治
グループリーダー研修会	赤潮と苦潮について	名古屋市水産会館	平成14年 6月22日	17名	愛知県水産試験場漁場環境研究部 岡本 俊治

表2 少年水産教室

(本 場) 開催時期：平成14年8月6日～7日
参加人員： 22 名

名称	研修（学習・講習）	講師	所属及び氏名
少年水産教室	ロープの結び方	指導漁業士	鈴木 清, 杉浦 幸雄, 伴 康芳, 石川 金男
	タモ網作り	水産試験場	専技, 職員, 相談員, 研修員
	ノリ養殖について	事務所	普及員
	水産講話	三谷水産高校	栽培漁業科長 小林 清和
	救急法・人工呼吸	蒲郡市消防署	職員 3名
	水産高校見学 カッター漕艇実習	三谷水産高校 水産試験場 事務所	教官, 生徒 専技, 相談員, 研修員 普及員

(漁業生産研究所) 開催時期：平成14年7月30日～7月31日
参加人員： 14 名

名称	研修（学習・講習）	講師	所属及び氏名
少年水産教室	伊勢湾産魚の同定・調理	水産試験場 事務所	専技, 職員 普及員
	ロープの結び方 タモ網作り	指導漁業士 水産試験場 事務所	濱本 昇, 吉川 光春 専技, 職員, 相談員 普及員
	救急法	知多南部消防組合	職員 3名
	航海実習	水産試験場	専技, 職員, 船員

表3 活動実績発表大会

開催場所：愛知県漁連海苔流通センター
開催時期：平成14年4月23日
参加人員： 250 名

名称	発表課題及び発表者	審査員	所属及び氏名
第49回愛知の水産研究発表大会	1. のり養殖におけるIT活用 大井漁協のり研究部 家田 忠悦	水産課	吉見 正文
	2. のり加工場における衛生管理について 吉田漁協のり研究会 中島 万三樹	農業経営課	金原 節子
	3. のり養殖経営の安定化を目指して ーアオノリの人工採苗の取り組みⅡー 清田漁協青年部 細田 亨	水産試験場 " "	瀬川 直治 田代 秀明 鈴木 好男
	4. 一色の海のくらしを発信しよう 一色漁協婦人部 鈴木 すみ子	県漁連	和出 隆治
	5. 見直そう, 私たちの養殖をもう一度Ⅱ ーなるたけ楽しんで儲けたいー 野間漁協青年部 吉田 和広	指導漁業士 " "	鈴木 茂 茶谷 芳邦 稲吉 光男

表4 漁業士育成

名称	項目・研究課題等	開催場所	開催時期	参加漁業士	講師 所属及び氏名
漁業士育成	愛知の水産物ライトアップ 特別料理講習会(親子料理教室)開催	名古屋市	平成14年 8月12日	2名	栄中日文化センター 料理教室講師
	ブロック研修 他県漁業士との情報交換, 連携	千葉県 銚子市	平成14年 7月19日 ~7月20日	2名	水産庁, 関係県
	隣県漁業士交流会 隣県漁業士との情報交換, 親睦	南知多町	平成14年 11月29日 ~11月30日	15名	静岡県漁業士会, 三重県漁業士会
	都市・漁村青年交流促進 マリン・カレッジ	南知多町	平成14年 8月3日	3名	県漁協青年部連絡協議会長 豊浜漁協青年部23名
	農山漁村女性の日推進大会	額田郡 幸田町	平成14年 11月26日	1名	
	漁業士研修会	名古屋市	平成15年 3月22日	18名	
	漁業経営者国内外研修報告	名古屋市	平成15年 3月22日	18名	指導漁業士 師崎漁協 吉川 光春

ノリ養殖指導

深谷昭登司・吉村憲一・鈴木好男

キーワード；ノリ養殖，採苗，育苗，秋芽網生産，冷蔵網生産

目 的

ノリ養殖は、気象・海況に大きく左右され、迅速な対応が要求される。そこで養殖管理に必要な情報を的確に把握し、生産性の高いノリ養殖を行うための適切な情報を提供する。

方 法

ノリ養殖業者へ地区別の養殖状況、気象・海況及び他県の生産・流通状況等の情報を提供するため、平成14年9月25日から平成15年2月26日にかけて週1度「のり養殖情報」を発行した。

養殖経過概要

平成14年度の本県のノリ養殖は、経営体数478戸（前年度より26戸減）、生産枚数7.8億枚（前年比107%）、生産金額79億円（前年比113%）、平均単価10.19円/枚（前年比99%）となり、生産枚数では過去5年平均の113%、生産金額では109%となった。1経営体当たりでは、平年比で生産枚数が143%、生産金額が138%であった。

漁期の特徴は、5年続きの高気温・高水温の影響から時期を遅らせてのスタートとなったが、大規模の病害が発症しなかったことにより、良質な種網の確保がなされた。冷蔵網生産期には病障害は若干認められたものの大きな生産障害には至らず、また赤潮による色落ち等の問題も小規模で、栄養塩量が不足しながらも比較的長期間安定して存在していたため、生産枚数が増加した。

1 採 苗

(1) 知多地区

東部地区の陸上採苗は9月16日から25日の間に開始された。一部では、殻胞子の放出不調及び黄斑病に悩む経営体も見受けられたものの、概ね順調に行われ、10月2日の篠島漁協をもって終了した。なお、芽付けは100倍1視野で20～30個程と平年並であった。

西部地区の陸上採苗は9月16日から22日の間に開始された。例年に比べると、殻胞子の放出が遅れ、採苗期間が延長したが、10月4日の豊浜漁協をもって終了した。

海上採苗は大野漁協で10月6日から8日に行われた。芽付けは100倍1視野で10～40個程であった。

(2) 三河地区

西三河地区の陸上採苗は9月12日から27日にかけて行われた。全般に好天に恵まれ、順調に経過した。後半には、気温の低下に伴う採苗水温の低下により、胞子の放出が抑制され、採苗に苦勞する地区も見られたが、ほとんどは順調に完了した。芽付け数は、100倍1視野で少ない地区では10個、多い地区では30～40個であり、やや濃いめの漁家が目立った。野外採苗は10月3日から14日まで行われたが、漁場水温の高かった10日以前の採苗網は、一時冷蔵入庫された。

東三河地区では海上採苗が中心（68%）であった。陸上採苗は早い人で9月17日から、多くの人が21日から開始した。胞子放出が順調で、9月30日ではほぼ終了した。芽付け数は、100倍1視野で30～50個であった。海上採苗は、蒲郡地区では10月2日から10月7日に行われた。渥美地区では早い人で9月26日から、多くの人が9月30日から開始、糸状体購入者は10月4日から開始し、10月15日に終了した。昨年の育苗の失敗から、高水温を避けて採苗網の避難入庫をした人もいたが、多くの人が直接張り込んだ。

2 育 苗

(1) 知多地区

東部地区では10月2日に、平成14年度第2回知多東部のり安定対策部会が開催され、採苗網の張り込み日は、10月6日以降と決定された。6日には師崎・篠島、7日に美浜町漁協、9日に片名漁協、10日に日間賀島・大井漁協で順次張り込みが開始された。育苗開始当初は例年発生する赤潮もなく概ね順調な育苗が行われたが、10月下旬より師崎・片名・大井漁協でハリヤマスイクダムシの付着が見られたほか、天候不順による干出不足により網の汚れやアオ等の付着に悩まされた。また、11月中旬に大井漁協以南でボラ・アイゴの被害が発生したが、大きな被害には至らなかった。冷蔵網の入庫は10月21日に師崎漁協で開始され、11月14日の篠島漁協をもって終了した。

西部地区では、平成14年度第2回知多西部のり安定対策部会が10月4日に開催され、陸上採苗網の張り込み時期について討議された結果、張り込み日は10月10日以降、大野の海上採苗網については10月6日以降と決定された。10日から大野・鬼崎漁協で、11日から内海漁協、14日から豊浜漁協、15日から小鈴谷漁協、16日から野間漁協で開始された。育苗は概ね順調に行われたが、大野・鬼崎漁協では一部の網で10月中旬よりアオや珪藻による汚れが目立った。また、11月上旬には鬼崎漁協でボラの食害が一部発生したが、大きな被害には至らなかった。冷蔵庫への入庫は、10月29日に豊浜漁協で開始され、一部の漁協では強風により入庫が遅れたものの、ほぼ順調に入庫が行われ、11月30日の鬼崎漁協をもって終了した。

(2) 三河地区

西三河のり養殖対策協議会で採苗網の張り込みは、10月10日以降と決定された。

実際の網の張り込み日は、10日以降で各漁協の判断により海況の安定、水温の降下状況を確認しながら実施されたが、西部漁場では水温の降下が鈍かったため、西尾地区では16日からの張り込み開始となった。

病障害は育苗期間後半にしろぐされ症と見られる芽落ちが一部の地区で見られた。また、全地区で付着珪藻による網の汚れが例年になく目立った。また、アオの付着も多かった。しかし、張り込みを全体に遅らせたことにより、高水温による障害はほとんど見られなかった。栄養塩は育苗期間を通して豊富に存在した。冷蔵入庫は、吉田地区で10月29日から開始され、11月16日の西尾地区を最後に終了した。全般的には、十分な種網を確保することができた。

東三河地区では、採苗網の張り込みは、陸上採苗網が10月1日から開始されたが、張り込み日が早い網については高水温や大潮時の干出等により、芽落ちや変形芽が見られた。

また、昨年と同様に育苗期間を通してアクナンテス等の珪藻やアオの付着が多く、その対策に苦慮した。

冷蔵入庫は、10月22日から始まり、10月29日～11月11日にピークを迎えた。蒲郡地区は11月11日に、渥美地区では11月25日にほぼ終了した。入庫網の葉長は1～3cmと3～5cmが中心であった。活力は概ね普通から良好であった。

3 秋芽網生産

(1) 知多地区

東部地区の11月の水温は平年よりもかなり低く推移し、また、栄養塩量も島しょ部の一部を除き概ね良好であつた。

た。12月に入って島しょ部の栄養塩も回復したうえ、大規模な植物プランクトンの発生もない安定した海況となった。しかし、例年のように東部全海域でボラ・アイゴ・クロダイ・カモによる食害が発生し、魚類については一部の漁協では防魚網を設置して対処した。特にクロダイによる食害は水温低下とともに12月上旬から終息に向かったものの師崎・日間賀島・篠島漁協では12月下旬まで被害を受けた。さらに例年に比べてハリヤマスイクダムシの付着が異常に多く、特に師崎・大井・篠島漁協では生産に対する影響が懸念された。

初摘採は11月11日に篠島・大井漁協で開始され、その後他組合でも順次行われた。日間賀島漁協では24日から開始したが、全漁場でクロダイと見られる食害により生産は遅れ気味であった。師崎・大井・篠島漁協では11月中旬よりスミノリが発生し、特に篠島では生産に大きな影響を受けた。スミノリは11月末には概ね回復したが、その後も製品はクモリ傾向にあり、12月上旬まで続いた。それ以降は製品の質も概ね良好のうえ病障害の発生もなく、下旬には一部で続いていた食害も終息し、秋芽網生産は順調に行われた。

西部地区では、単張りは入庫作業と並行して進められ、11月下旬にはほぼ単張りが終了し、生産体制に入った。生産期の水温は平年よりもかなり低く推移し、また、栄養塩量も一部の地区を除き概ね良好なうえ、大規模な植物プランクトンの発生もない安定した海況となった。しかし、大野・鬼崎漁協ではボラ・カモの食害による被害が発生し、豊浜漁協でもボラ・クロダイ・メジナによる食害の対応に苦慮した。

初摘採は11月14日に鬼崎漁協で始まり、21日には小鈴谷・豊浜漁協で、22日には大野漁協、24日には野間漁協、26日には内海漁協でそれぞれ開始された。11月下旬より小鈴谷漁協であかぐされ病が散見されたが、早期摘採等の対策により大きな被害には至らなかった。しかし11月下旬には大野・鬼崎漁協で細菌由来と考えられるスミノリ症が発生し、特に鬼崎漁協では製品がB系統になるなどの大きな被害を被った。他の漁協では摘採当初は穴の製品が目立ったものの、その後は伸び・色・艶とも良好で概ね順調な生産が行われた。

今漁期は昨漁期と同様に、漁協ごとに張り込み日が異なつたうえ、あかぐされ病の蔓延も免れたため、秋芽網の撤去および冷蔵網への切り替え時期は各組合の判断に委ねられた。

なお、第3回共販までの知多地区からの累積出荷枚数は、1億2127万枚（前年比106%、平年比143%）生産金額は14億5233万円（前年比92%、平年比118%）、平均

単価は11.98円/枚（前年比86%，平年比83%）であった。

(2) 三河地区

秋芽網生産期は、海況も良く大規模な赤潮の発生は見られず、順調に経過した。

西三河地区では単張りは、11月3日から開始された。摘採は一色、吉田地区で11月15日から開始され、張り込みの最も遅かった西尾地区でも、19日には摘採が開始された。今年度の育苗は、やや高水温傾向で始まったものの、単張り開始頃に前後して水温は急激に低下し、秋芽網生産期は平年より3℃前後低めで経過した。このため、浮流し・支柱柵ともあかぐされ病をはじめとする病障害は、ほとんど発生することなく経過し、生産は順調に行われ、すべての地区で平年を上回る生産をあげた。

網の撤去は、水温が例年になく低いこと、あかぐされ病の発生が認められないことから、12月2日の西三河のり養殖対策協議会の決議により、各組合の判断に委ねられた。これにより、西尾、吉田、吉良地区が12月13日までに、撤去を完了したのを始め、他の地区でも順次撤去が完了し、一色、衣崎地区が18日までに完了したことにより、同時期には秋芽網生産は全漁場で終漁した。

なお、第3回共販までの西三河地区からの累積出荷枚数は、7,553万枚（前年比121%，平年比189%）生産金額は8億6,620万円（前年比100%，平年比152%）平均単価は11.47円/枚（前年比83%，平年比80%）であった。

東三河地区では、秋芽生産網の張り込みは漁場によりバラツキが大きかった。摘採は、渥美の早い所が11月15日から支柱柵で始まり、17日からは浮き流しでも開始された。一方、蒲郡では大幅に遅れ12月5日に開始された。

病害は、11月20日頃にあかぐされ病が芽付きの濃い重ね網で葉先に散発的に見られたが、大きな影響を受けず順調に生産が行われた。

なお、第3回共販までの東三河地区からの累積出荷枚数は、1,033万枚（前年比118%，平年比126%）生産金額は1億407万円（前年比102%，平年比112%）平均単価は10.07円/枚（前年比86%，平年比89%）であった。

4 冷蔵網生産

(1) 知多地区

東部地区では冷蔵網への張り替えは、12月13日から片名漁協で始まり、大井・美浜町漁協でも順次行われた。一方、師崎・日間賀島・篠島漁協では1月から張り替えを開始したが、引き続き秋芽網で生産を続ける漁業者が多く、2月中旬ようやく張り替えを終了した。

今季の冷蔵網生産は例年に見られるような大規模なあかぐされ病の発生もなく概ね順調に行われた。その一方

で美浜町漁協では、秋芽網生産期から続くカモによる食害を受けた。また、片名漁協から美浜町漁協では珪藻プランクトンの付着により摘採間隔を短くするなどの対応を余儀なくされた。

栄養塩量はキートセロス・スケルトネマを中心とした植物プランクトンの発生に伴い、1月下旬に島しょ部を中心としてかなり減少した。その後、若干持ち直したものの、2月中旬からさらに減少した。これにより葉体の色落ち・伸長不良が発生し、3月中旬まで生産に影響を受けた。さらにあかぐされ病の被害が拡大したため、師崎・片名・日間賀島漁協を除いた漁協では3月下旬でほぼ終漁となった。

西部地区では、冷蔵網への切り替えは12月21日から野間・豊浜漁協で始まり、その後、小鈴谷・鬼崎漁協で年内に、内海・大野漁協では年明けに始まった。

魚類の食害は豊浜漁協で1月中旬まで続いた。また、大野・鬼崎漁協では浮き流し漁場でカモによる食害が断続的に発生した。今漁期の栄養塩量の動向は北部漁場では安定していたものの、内海・豊浜漁協の漁場では2月に入って低い値となった。

病障害ではすべての漁協であかぐされ病が散見されたが、大きな被害には至らなかった。また、鬼崎漁協では1月上旬に、小鈴谷漁協では同月中旬にスミノリ症が発生したが軽微な被害で沈静化した。

生産は大規模な色落ちもなく、製品においても一部の漁協で穴・ガサツキ等が発生した以外は良好な海況のもと順調な生産が行われた。しかし、内海・豊浜漁協では栄養塩量の低下に伴い、若干の色落ちが発生したものの大きな被害には至らなかった。なお、今漁期も荒天が多く出漁日数が制限された。

知多西部の特色である後期冷蔵網の出庫は1月29日の野間漁協に始まり、2月に入って各漁協でも順次行われた。北部漁場ではのり葉体の色、伸びとも引き続き良好であったが、中部以南では、葉色が浅くなり、成長も悪くなってきた。のり製品は南部ほど色が浅くなった。しかし、3月になると栄養塩量も回復し、色が戻ってきた。3月末にはあかぐされ病の蔓延で生産がほぼ終了した漁協もあったが、大部分は4月に入っても生産が続いた。

(2) 三河地区

西三河地区の冷蔵網の張り込みは、12月14日（西尾地区）、15日（吉田、吉良地区）、17日（栄生地区）、18日（味沢地区）、19日（一色地区）、22日（衣崎地区）でそれぞれ開始された。摘採は、西尾、吉田地区で28日から始まった。その後、各地区でも摘採が始まり、最も張り込みの遅かった衣崎地区では7日から摘採が開始さ

れた。病障害は、年末年始にかけて、西尾、衣崎、吉田の各地区で軽い橙胞病が発生したものの、ほとんど被害はなかった。あかぐされ病およびしろぐされ症が散見される地区もあったが、大きな被害はなかった。また、1月中下旬頃から味沢、吉田地区で製品のクモリが目立つようになり、一部ではスミノリとなった。このため、張り込み水位を上げるなどの対策を実施した。2月以降、芽の濃い網を中心にあかぐされ病が散見されるようになった。また、製品はガサツキ、穴が目立つようになったが、色はあり、九州や瀬戸内海などの不作にも助けられ、高単価で販売された。浮き流しは2月中旬頃から色が褪め始め、同月下旬から各地区で網の撤去が始まり、3月20

日までには、枠の撤去も完了した。3月下旬の9回汐で概ね終漁となったが、衣崎、吉田漁協では10回汐まで生産が続いた。

東三河地区の冷蔵網への張り替えは12月上旬から一部地区だけで行われた。大半の人は秋芽網での継続生産(一期作)を行った。冷蔵網生産は1月10日以降の支柱柵で始まった。あかぐされ病が見られたが、被害は軽く、生産への影響は少なかった。しかし、2月19日～20日にかけて、一部地区を除き突然急激な傷み(降雨、無風、水温上昇であかぐされ病)が葉体基部まで進行した。3月に入り全域で葉体の老化が進み製品の色も浅くなり網整理が始まり、これ以降はアオノリ生産に切り替わった。

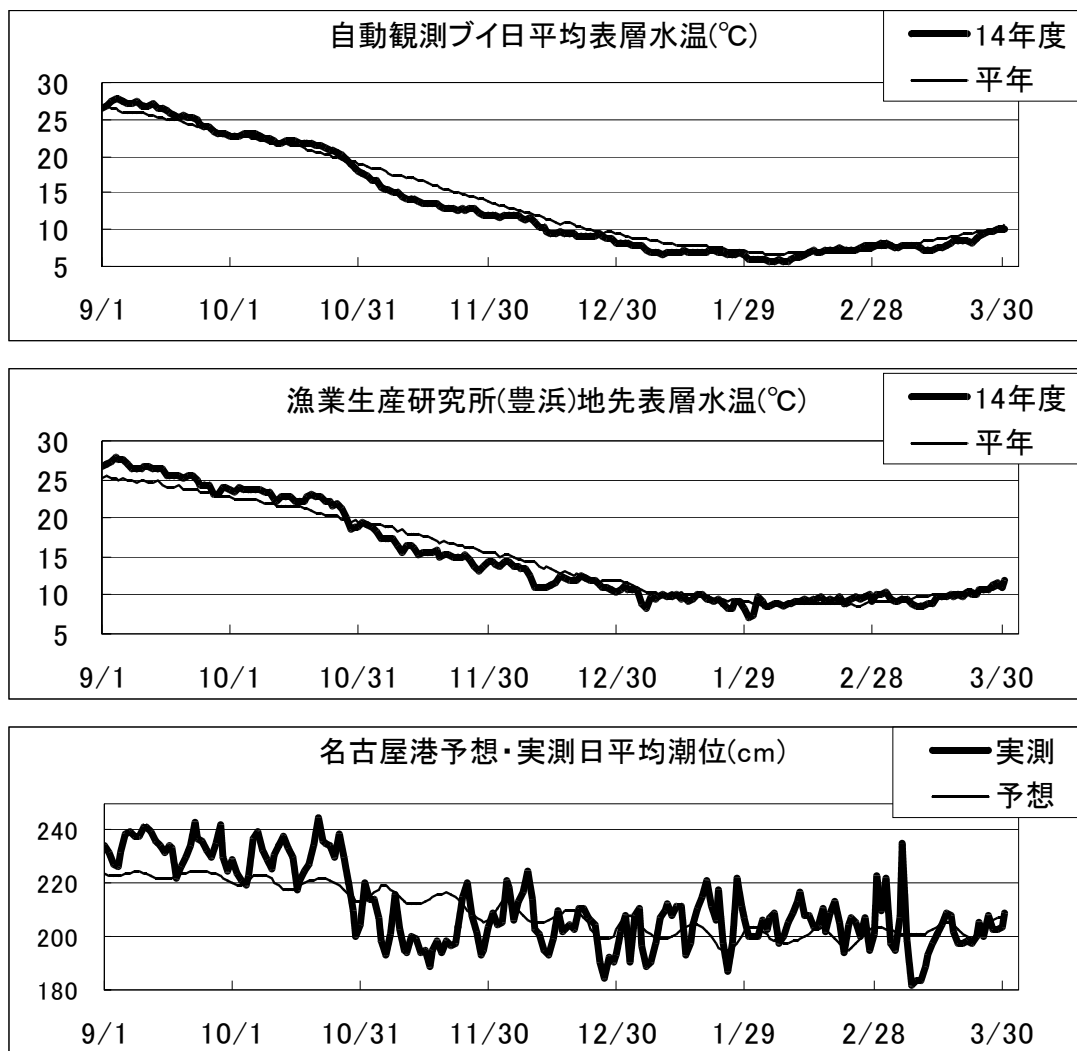


図 平成14年度の水溫・潮位経過